応神天皇 恵我藻伏崗陵外構柵設置その他工事に伴う立会調査

はじめに

応神天皇恵我藻伏崗陵（以下、「当陵」という）は大阪府羽曳野市誉田六丁目に所在する前方後円墳で、遺跡としての名称は誉田御廟山古墳である。当陵の北側には域内陪冢である丸山が築造されている。また当陵の東側には飛地ろ号が所在し、遺跡としては栗塚古墳と呼称されている。このたび、域内陪冢丸山の東側及び、飛地ろ号の南・東側に建てられている外構柵の設置及び改修工事を行うこととなったため、工事箇所における遺構・遺物の有無の確認を目的として、当部職員による立会調査を行った。調査は足達悠紀が担当し、須藤周太、荒木崇行が補助した。調査期間は令和７年１月20日～24日の５日間である。陵墓関係学協会への調査地公開は、令和７年１月23日におこなった。なお、高さの基準には東京湾平均海面（Ｔ．Ｐ.）をもちいた。図面で使用している方位記号の方角は磁北である。

１．域内陪冢丸山

既存調査　昭和54年の外構柵門扉柱設置に際して調査が実施されており、地表から約0.6ｍは埴輪片を包含する黄褐色礫混じり層で、地山と接すると報告されている[1]。また、域内陪冢丸山の北側には大鳥塚古墳と狼塚古墳が所在している。特に狼塚古墳は、平成９年に実施された藤井寺市教育委員会による調査と墳丘の復元案によると、今回の立会調査地点と非常に隣接することが注目される[2]。

掘削箇所の概要　基礎ブロック設置箇所（①～⑱）について、それぞれ長さ0.4m×幅0.4ｍ×深さ0.6ｍ程度掘削した。掘削箇所東側には、隣接地のブロック塀が地表から高さ30cm程度残されている。また、掘削箇所西側には、従来所長官舎が建っていたが、現在は官舎に併設していた車庫のみが残っている。

土層　確認された土層は、Ⅰ：表土（黒褐色腐植土層）、Ⅱ：造成土（橙色粘土質層。所長官舎や車庫を建てる際の造成土か。）、Ⅲ：流土（有機質土と橙色粘土がまばらに混じる褐色粘土質層。墳丘に二次的に堆積した土が流れたものか。）、Ⅳ：地山（橙色粘土質・橙色砂質層）である（第38図）。調査区域の北端（①～⑤）では、標高23.55ｍ程度まで掘削したものの地山まで到達しなかったが、区域の中央付近（⑥～⑮）では標高23.6～23.7ｍ付近で地山を確認することができた。地山は⑫付近で最も標高が高くなるが、明瞭な傾斜は示さないため、外堤の様相を反映するかどうかについては判断ができない。なお、南端（⑯～⑱）は掘削面まで現代ゴミが混じっており、民地側ブロック塀の改修時に大幅な撹乱を受けたようである。①～⑩ではⅢ層から埴輪片が出土し、⑥ではⅢ層から初期伊万里碗の破片が出土した。

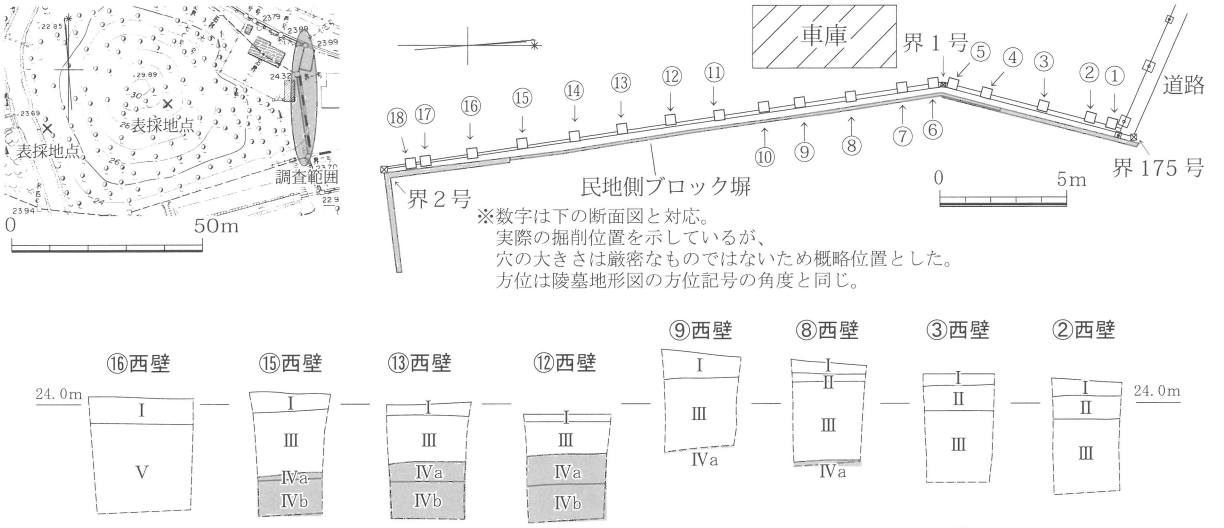
２．飛地ろ号

既存調査　昭和63年度に羽曳野市教育員会により飛地ろ号の南側及び西側で調査が実施された[3]。その結果、周溝や葺石、埴輪列が検出された。この成果により古墳の規模が再検討され、裾部で一辺約43ｍを測ることが明らかになった。また、調査された一帯は茶山遺跡の範囲にも含まれており、奈良時代や中世の遺物も多量に出土している。

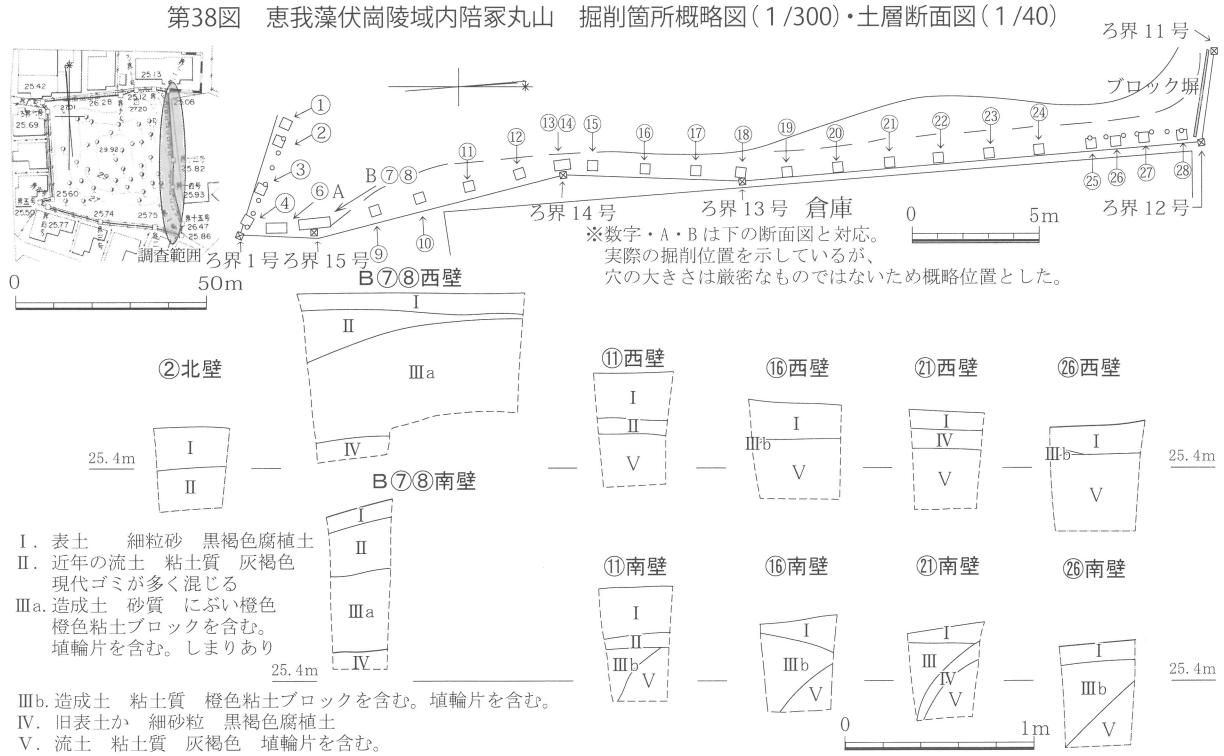
掘削箇所の概要　外構柵の基礎ブロック設置箇所（①～㉘）について、それぞれ長さ0.4m×幅0.4ｍ×深さ0.6ｍ程度掘削した。また、門扉の基礎ブロック設置箇所（A・B）はそれぞれ長さ1.2ｍ×深さ0.8ｍ程度掘削した。外構柵設置箇所の北側４ｍ及び西側４ｍには、土留め柵設置のために直径６㎝程度の鋼管を打ち込んだ。

第37図　恵我藻伏崗陵域内陪冢丸山・飛地ろ号調査地位置図（1/12,500）

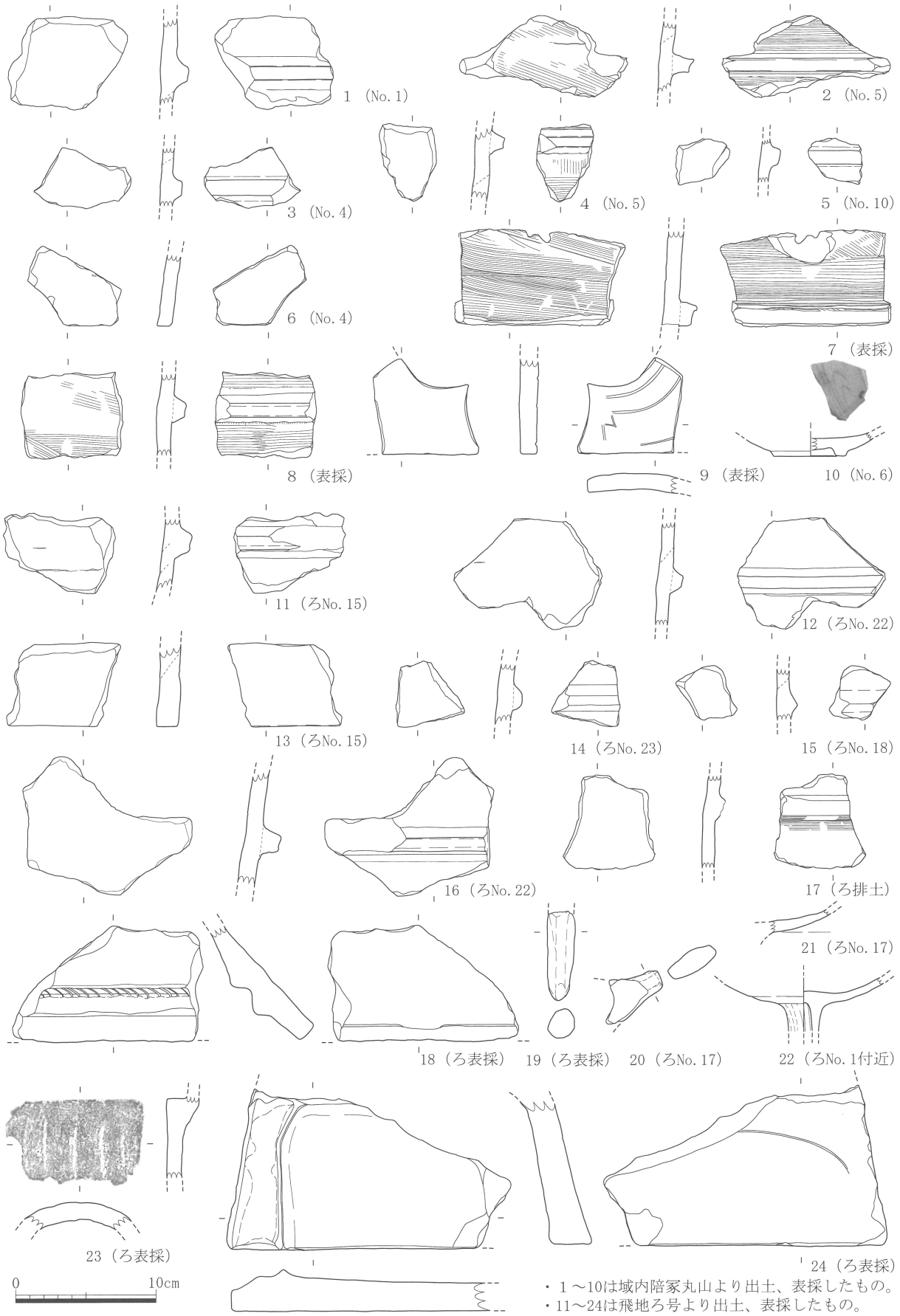
土層　確認された土層は、Ⅰ：表土（黒褐色腐植土層）、Ⅱ：近年の流土（灰褐色砂礫層）、Ⅲ：造成土（橙色砂礫層・黄橙色粘土質層）、Ⅳ：旧表土（黒褐色土層）、Ⅴ：流土（有機質土を含む褐色粘土質層）である（第39図）。調査区域の南側（①～④）では現代ゴミが多く混じる流土（Ⅱ層）が厚く堆積している。表土（Ⅰ層）と流土（Ⅱ層）には拳大の礫が多量に確認され、これらが葺石である可能性は否定できないが、原位置からは大きく動いていると考えられる。調査区域の東側（⑥～⑪）はコンクリートによる道の舗装をおこなった際に大きく攪乱されており、その際に盛られた造成土（Ⅲａ）が堆積している。また、調査区域の北側（⑪～㉘）で確認された造成土（Ⅲｂ層）は、北東側に位置するＵ字側溝及び倉庫の建設に伴う造成土と考えられるが、この層から埴輪片が多数出土しており、墳丘盛土などを用いて造成したと推測される。



第38図　恵我藻伏岡陵域内陪冢丸山　掘削箇所概略図（1/300）・土層断面図（1/40）



第39図　恵我藻伏岡陵飛地ろ号　掘削箇所概略図（1/300）・土層断面図（1/40）



・１～10は域内陪冢丸山より出土、表採したもの。
・11～24は飛地ろ号より出土、表採したもの。

第40図　恵我藻伏岡陵域内陪冢丸山・飛地ろ号　出土品実測図(1/4)

３．遺物の概要

出土・表採遺物は埴輪片・土師器片・瓦片・陶磁器片などであり、総数は73点であった。域内陪冢丸山では流土（Ⅲ層）から、飛地ろ号では造成土（Ⅲ層）及び流土（Ⅴ層）から出土している（第40図）。

１～６は域内陪冢丸山の掘削箇所から出土した円筒埴輪片である。ただし、今回の工事箇所は、丸山の北東側に位置する狼塚古墳と近接しており、いずれの埴輪片も丸山に伴うとは断言できない。１・３・５は摩滅が激しく、調整痕は確認できない。２・４は突帯の突出が比較的強く、硬質な焼き上がりである。２の外面はヨコハケ、内面は左斜め上方にハケを施す。４は突帯の上下にヨコハケが施され、突帯の下方には一次調整のタテハケが残る。外面は暗灰色、内面は橙色を呈する。６は円筒埴輪の底部片で、内外面に斜め方向の擦痕が残るが明瞭ではない。７は域内陪冢丸山墳頂の南東側付近で表採した円筒埴輪片である。外面は一部左斜め上方にハケを施すが、ヨコハケによって切られる。内面はヨコハケか左斜め上方にハケを施す。突出が比較的強いもので、突帯の上面はヨコハケもしくは板ナデによって調整される。硬質な仕上がりで、内外ともに暗褐色を呈する。８・９は丸山の西側墳裾（応神天皇陵参道沿い）で表採した。８は円筒埴輪片である。外面はヨコハケを施すが、工具が一度器面を離れており、ヨコハケの継ぎ目が観察できる。内面はヨコハケ・左斜め上方にハケを施す。突帯の上方及び下方には、わずかに一次調整のタテハケが残る。９は器種不明の形象埴輪片である。外面に線刻が施される。10は初期伊万里の碗である。見込みに染付がある。

11～14・16は飛地ろ号の掘削箇所から出土した円筒埴輪片である。11・12は摩滅が激しく、調整痕は確認できない。13は円筒埴輪の底部片である。14は突帯の突出が比較的弱いものである。16は摩滅が激しく、調整痕は確認できない。15は形象埴輪の一部か。20～22は飛地ろ号の掘削箇所から出土した土師器である。20は鍋の把手か。ケズリによって整形され、断面は楕円形を呈する。21は高坏の坏部である。摩滅が激しく調整は不明だが、比較的精良な胎土を用いている。奈良時代のものか。22は奈良時代の高坏である。脚部の内外面は縦方向のケズリによって整形され、中空に仕上げられる。17は排土中より採集し、18・19は墳丘東側斜面で表採した埴輪・土製品である。17は突帯の下面と下方にヨコハケが残り、上方には擦痕が確認できる。18は家形埴輪の軒先片である。壁面との接合部に刻みが施される。摩滅が激しく調整痕は確認できない。19は器種不明の土製品である。縦方向に削り、細長く仕上げる。23は墳丘東側斜面で表採した丸瓦である。凸面には縄目タタキが残るが、ほとんどがナデ消されている。凹面には布目がわずかに残る。24は墳丘南側斜面で表採した土師質の器種不明品である。外面には線刻が施されている。内面には剥離痕が確認でき、なんらかの部材が接合していたものと考えられる。

域内陪冢丸山及び飛地ろ号で出土した埴輪片は、いずれも黒斑を有さないものであり、穴窯で焼成されたものであろう。川西編年Ⅳ期に属すると考えられる。

４．まとめ

調査の結果、域内陪冢丸山及び飛地ろ号はいずれも、隣接する構造物の建設時に攪乱を受けていることが確認された。遺構は検出されなかったが、どちらも埴輪片を中心として遺物が多数出土した。また、丸山では地山が検出されており、北側に位置する古墳との関係や、当陵の外堤などの様相を検討する上でも重要な情報を提供するものと考えられ、今後も引き続き地下の状況に注意を払う必要があろう。今回の工事範囲では遺構を毀損する恐れがないことが確認されたため、工事は予定どおり施工した。　（足達悠紀）

註

（１）　土生田純之「応神天皇陵外構柵改修区域の調査」『書陵部紀要』第31号、宮内庁書陵部、1980年。

（２）　藤井寺市教育委員会『古室山･大鳥塚古墳　附章　狼塚古墳』（『藤井寺市文化財報告41』）、藤井寺市教育委員会、2017年。

（３）　羽曳野市教育委員会『古市遺跡群10』（『羽曳野市埋蔵文化財調査報告書18』）、羽曳野市教育委員会、1989年。

（４）　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、日本考古学会、1978年。

1　調査地全景（北から）

2　調査箇所 No. 2（東から）

3　調査箇所 No. 4（東から）

4　調査箇所 No. 8（東から）

5　調査箇所 No.12（東から）

6　調査箇所 No.15（東から）

7　調査箇所 No.16（東から）

8　出土・表採遺物

1　調査地全景（南東から）

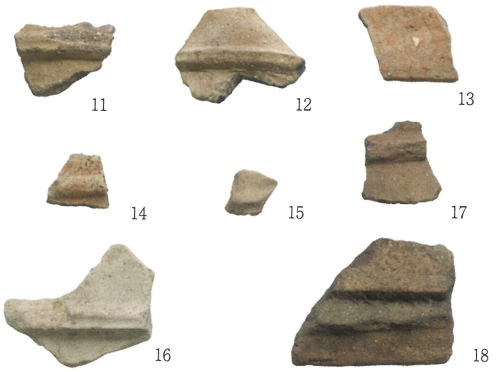
2　調査箇所 No. 2（南から）

3　調査箇所門扉 B・No. 7・No.8（東から）

4　調査箇所 No.10（北から）

5　調査箇所 No.16（北から）

6　調査箇所 No.21（北から）



7　出土・表採遺物①

8　出土・表採遺物②